

川に湿地を

十勝各地にあった湿地は、水はけをよくすることで、大きく減り、農地や住宅地へと変わっていきました。

その分、湿地に育つ植物や動物、鳥などの生き物が急速に減っていきました。(p216)

そこで、生き物のために、新しく人の手で湿地をつくることできないかと、河川敷などで工夫された場所もあります。



ヤナギタウコギ。湿地に生える草。絶滅の危険性が高い。



(上)堤防づくりに使う土を取ったあとの河川敷にできた湿地。どんな生き物がいるのか調べているところ。



札幌川で産卵行動をするサケ。

魚を増やし、産卵場所を増やす

川に少しの変化をつけるだけだと、とくに大きな魚は、なかなか増えません。そんな場合、人の手で卵をかえして子どもを育て、川に放流する必要があります。

サケについては、明治時代のなかばころから漁業のために人工的なふ化・放流が行われてきました。(p174・p236)

最近、とても少なくなり「幻の魚」といわれるイトウを増やそうと、卵をとり、ふ化させて育てることにチャレンジしている人たちがいます。

また、サケやシシャモが自然の中で卵を産む場所であり、新しい子どもがふ化するための場所である「産卵床」を増やせないか、という取り組みもおこなわれています。

まだまだ問題も多い... 豊かな自然から迷惑をかけられることもある

自然が豊かで、身近にいろいろな生き物がたくさんいることは、いいことだといえるでしょう。

しかし、自然が豊かな川になると、問題も起きてきます。

例えば、川ぞいに木が増えすぎると、洪水が流れにくくなります。今でも、大雨が降れば洪水は起き、洪水がスムーズに流れなければ暮らしの場に水があふれ、水害が起きるのです。また、洪水の時に木が流されると、海で魚をとる網をダメにしてしまうことがあります。

湿地をつくるということは、その周りの水はけが悪くなることにつながるかも知れません。農地や住宅地の水はけが悪くなるとは困ります。また、生き物がふえれば、畑の

作物をあらず動物も出てきます。

とくに農業や漁業など自然と向かい合う仕事では、自然から大きな迷惑や被害を受ける場合があるのです。

自然を豊かにするときには、そのマイナス面があることを忘れてはいけません。

その上で、どういう方法が問題が少なく、公平な解決法なのかを、いろいろな立場に立って考えなければならぬのです。



デントコーン畑でエサを探すマガン。

3 生態系(せいたいけい): ある決まった区域(くいき)にいるいろいろな生き物と生き物、さらにそれを取りまく環境(かんきょう:水・土・温度・日光など)が、つながりまとまっているようす。